

# 創世記



原作：詠人不知 翻訳：蔵小路タマ



ハイ、世田谷ネコのタマだよ。ねえねえみんな、どうやって世界ができたか知ってる？ アタシは知らなかった。っていうか、気にもしてなかった。そしたらこのあいだ、タロがすごいもん見つけたんだ。世界の始まりが書いてある紙だよ。誰がいつ書いたのか誰も知らない。狛江市と調布市の間に野川っていう川があって、その近くに昔の防空壕があって、その中に象印魔法瓶がいっぱい落ちてて、中にトイレットペーパーがたくさん入ってた。そこに線文字Bで「知られざる真実」が書いてあったの。すごいでしょ。アタシたちはこの紙を、市の境界から見つけたから「市界文書」って呼んでる。えっ、聞いたことある？ 気のせいだよ。

すごく古いトイレットペーパーなんで、あちこち破れてて、読むのは苦労したよ。でもみんなで手分けして読んだんだ。人間に知らせようとしたら、おかさんが「やめときなさい」って言うから今日まで黙ってたけど、やっぱり教えてあげたい。で、アタシが人間に読める字に直したのがこのテキストってこと。長いから全部は無理で、今回はアタマの五分の一くらい。原文は線文字Bのまま治田ニエストル共和国のネコペディアに出しといた。興味がある人は探してみて。

んじゃ、どーぞ。

蔵小路タマ

## 一日目

神様はヒマだった。あくびをしてもヒゲをピクピク動かしても面白くなかった。思い出せる限りのずーっと昔から、この、宇宙のどこでもない場所で丸くなってダラーツとしていたからだ。そろそろ本格的に飽きてきた。そうだ、なんかして遊ぼう、と神様は考えた。

手間のかかることは面倒だ。安直にできることって、なんかないかなあ、と神様は思った。そこでダメトで「光あれ」と呟いてみた。

周りが明るくなった。なんだ、簡単じゃないか、と神様は世の中を甘く見た。それはそれで正解だった。世の中、最初は甘いのだ。

明るくはなったが、周りを見るべきモノが何もないので、神様には何も見えなかった。何も見えなきゃ暗いのだと同じだ。そこで「なんかあれ」と言ってみた。すると、どこからかテレパシーのようなものが伝わって来て「もう少し具体的にお願いします」と告げた。少し面倒なことになったな、と神様は思っ

た。それはそれで正解だった。次に何かしようとする世の中は面倒なのだ。「それじゃ、こういう動物を作れ」と空中に絵を描いてみた。テレパシーはしばらく黙って考えていた。神様は絵がむちゃくちゃに下手だったからだ。

いきなり神様の周りで小さな動物たちが走り始めた。何が楽しいのかチューチュー鳴いている。「よし、お前らをネズミと名付けよう」

世界で最初の動物、ネズミが誕生した。ネズミは次々と現われて神様にまとわり付き、愛嬌を振りまいた。まんざらでもない神様はネズミを撫でたり手で叩いたり、柔らかい背中を甘噛みして遊んだ。単純な遊びなので神様はそのうち飽きてきたし疲れて眠くもなった。もう遊びはおしまい。

丸くなって寝ようとしてもネズミたちは大騒ぎを続けた。その騒々しさでなかなか眠れない神様は、ついにキレて「うるさい！」と叫んだ。それがネズミには「ガオーッ！」と聞こえたらしく、驚いてみんな逃げ散ってしまった。ネズミがネコから逃げるのは、このときの記憶が遺伝子に刻み込まれているからである。神様はやっと安眠した。

## 二〇〇

次の日、神様はまたヒマになってしまい、ネズミを全部追い出したのを悔やんだ。一匹でも残しておけば遊べたのに。もう一度ネズミを作るのも芸がない。そうだ、今日はどこかに出かけてみよう。

神様は、それまで座っていた場所から足を踏み出した。ところが、つま先には何も触れず、足はどこにも着かなかった。周り中全部、ただの空間だったからだ。「そうか、床も地面もないのだ」やっと神様は気付いた。これまで居たのは座布団くらいの雲の上だ。座布団にしか居られないのは招き猫か落語家か仏壇の鈴くらい。いくら神様でも行動の自由はあってもいい。

少し腹を立てながら「地面を作れ」と命じた。何も起こらなかつた。しばらくしてテレパシーからの答えが返って来た。「明かりを点けるとか動物を作るとかなら簡単だけど、地面はちよつと大きすぎます。最初から作るには時間がかかりまっせ」

「どのくらいだ」

「えーと、それじゃネコでどうだ」  
「いいよ。で、何を食べればいいの」  
「何をもって、ここにはまだネズミしかいないから、それでも食ってたらいい」  
ネコは「わかった」と答えて、どこかに行ってしまった。  
ネコがネズミを獲る習性はこのときから始まった。  
あーあ、今日は忙しかった。地面なんか作ったからね。働きすぎだ。神様は眠った。

「なにこれ」

「下手な絵を空中に描かれても困るって、こっちのデザイナーが言うもんで。それに描いてくれますっ」  
画才の無さを少しは自覚している神様は、黙って従うことにした。まず付属のカメラで自分の写真を撮り、自分がどんな形なのかを確かめた。全身毛だらけで耳は立っていて、目つきは良くないけれど、全体としてはそれほど不細工ではないとわかって安心した。写真を元に動物のスケッチを描き始めたが、お尻のほうはどうなっているのか、よくわからない。自分の後姿は撮りにくいのだ。しかたなく、なるべく長いシッポを描いた。身長は四倍くらいの長さにした。

指定されたメアドに絵を添付で送ると、すぐに新しい動物が目の前に現われた。色を塗るのを忘れていたので全身真っ白だ。

「すごい、出来上がった。お前は何という生き物だ」  
神様が訊くと、その生き物は「名前はまだ無い」と答えた。

「そうだなあ、三億年くらいでしようか」

「うっそ。一日でなんとかしろ」

「そんなあ、無理ですよ。えーと、それじゃ、どこから盗んできちゃダメですか」

「どっかに手頃なのがあるの？」

「はい、あつちこつちに四個ばかり陸地があります。それを引っ張って来てつなげればいいかと」

「いいよ、許す」

これで神様の下に地面ができた。いわゆる国引きである。なお、引っ張り集めた四個の陸地は元々は外国のもので、後で領土紛争のタネになるかもしれないのだが、神様はまったく気にしなかつた。足を下ろすと今度は地面に触れた。なかなか良い

感触だ。見渡すと、ずーつと彼方まで土だけの殺風景な景色だった。いずれなんか作ればいい。神様は新しい地面をあちこち歩き回って、うん、おれの土地だ、と機嫌を良くした。

ネズミはどこかに隠れてしまつたらしく、動物の姿はまったくなかつた。こんな立派な土地に生き物がいないのはさみしい。神様は自分に似た姿の動物を作ろうとした。また空中に絵を描いて「こんな

ネコが駆け込んできて神様を起こした。

「いつまで寝てんだろうね、まったく」

「いつまでだろうといいのだ。好きなだけ寝るのだ」

「怠け者、何様のつもりよ」

「神様だよ」

ネコはしばらく考えて、やっと思い出した。相手は神様だった。

「初期不良を報告するからね」

「不良？ そんなわけないよ。神様は間違えないのだ。

神の無謬性って知らない？」

「知らない」ネコはきつぱり言った。「それより製造者責任って知らない？」

「知らない」神様もきつぱり言った。

一瞬間があつてからネコが言った。「こんなシツ

ポじゃネズミなんか獲れないよ。意味無く長いから歩きたびに引きずってゾロゾロいって、ネズミはみんな逃げちゃう」

やっぱ少し長すぎたかな、と神様は思った。ネコ

は続けた。

「それに、草も木もないから隠れる場所がどこにもないじゃん。どうやってネズミに近付くのさ」

それもそうだと神様は思った。ネコは続けた。

「ずーっと明るいものにも困ってる。昨日は穴掘って寝たけど、穴掘りなんてネコの仕事じゃないでしょ。

一日の半分くらいは暗くしてもいいじゃない」

ネコってこんなに文句たれなんだ、と神様は思った。ただ、ネコの言っていることは全部もつともなことではあつた。

「わかつたよ。もう言うな。前向きに全力で努力する」

「前向き？ 全力？ 努力？ 聞いたようなこと言うね。

その手には乗らないよ。まず今すぐにシツポから解決してもらおうか」

神様はネコをぐつと睨んで、シツポを体と同じく

らしい長さに切つてやつた。

「どうだ、歩きやすいだろ」

「まあいいかな。目見当で切つたにしちゃ出来た。それで、余つたシツポはどうするの？」シツポはまだのたくつていた。

「面白そうだから、しばらく遊ぶ」神様はシツポに

ジャレつこうとした。

「それ、半分くれない？」ネコが言った。「半分で、ネコをもう一匹作つてアタシにちょうだい」

そうか、クローンか、と博学の神様は悟つた。そこで、シツポをまた半分に切つて「ネコになれ」と命じた。するとネコができた。

「わあ、オスネコじゃん。アタシはメスだからちやうどいいわ」二匹のネコは並んで帰つて行った。

ほんとにもう、クレーム処理ほど疲れるものはない。今度から、作つた動物には「ノークレーム、ノーリターン」の念書を取ろうと決意し、タブレットで念書の書式を作つた。

まだシツポは余っている。真っ白でうねうね動いて面白かつた。そうだと、手足があつて口が利けるから文句を言うのだ。手足をなくして声も出せない動物を作ろう。

へびが出来上がった。へびは舌をチロチロ出しながら、どこかに行つてしまった。

次は草を生やすのか。「草よ、適当に生えろ」と神様は言った。するとタブレットからビーブ音が聞こえ、「描いてもらわないと作れません」とテレパ

シーが言った。

面倒だな。向こうのデザイナーには創意工夫つていうものがないんだ。仕方なく神様は草の絵を何種類か描いて送つた。「色は全部緑でいい。合体させて新種を作つてもいいよ」とメールに書いた。

神様の周り中に草が生え、見渡す限りの草原になった。なんとどのどかな光景ではないか。神様は昼寝することにした。

ほとんどの草が緑色なのは、このときの神様の色指定による。

少して目覚め、あたためて草原を見渡すと、緑一色なのは少しさみしい気がしてきた。風景として単調すぎる。そうだと、花を咲かせよう。

タブレットに何種類か花を描き、今度は律儀に色を指定した。黄色、赤、白、その他思いつく限りの色にした。花の色が様々なのはこのせいだ。ただ、黒い花を作るのだけは忘れていた。

今日もたくさん仕事をした。こんなに働いては体に毒だ。寝るとしよう、と思つたが、また明日もクレームが来るといけないから、寝る前に「光よ消えろ」と呟いた。世界は真っ暗になった。



## 本文書について、各界のコメント

【隣のタロ君談】

ボクはただ掘っただけなので言うことなんかないけど、もう一回掘って、カワラや瀬戸物のカケラが出てきたら怖いな。

【長野の長老談】

まさに時空を超えた通信であり歴史に残る発見である。わしも大銀河長老連合の一員じゃからして無関係ではない。

【おかさん談】

ほんとにもう、いつも娘が大騒ぎして馬鹿なものを書き、申し訳ありません。続きなど書かないように、きつく言っておきます。

【カッチャン談】

なんだか知らねえけどよ、こりゃネコワニと関係あるって踏んでるんだ。出てきたのが川つぶちだろ。間違えねえよ。

【ミツチャン談】

最近タマがPCC占領しててチャットができなくて困ってます。何やってるのかしら。課金されるゲームじゃなきゃいいけど。

【薄ぐれのマサ談】

なんかすげえもんが見つかったってね。出入りがありそうならいつでも行かせてもらいます。ツメは研いどいてくたせえ。

【長野のシュレ談】

当該文書は論理的整合性に優れ学術的価値としては類似文書を遙かに凌駕し最高水準の第一級資料であると一学究として確信します。

【タケチヨ談】

聞いた話だと犬は一匹も出てこないらしい。ネコと同じミマキスが祖先なのに。えっ、進化論じゃないの？ねえ。」」ー読ませてよ。



## おひき

ものすごい悪夢だった。肉球と鼻の頭から汗を噴き出しながら神様は目覚めた。昨日作った草が大きく成長してネコの背丈の十倍以上になり、草に囲まれて身動きできない夢だ。もし本当にそうなれば、閉所恐怖症の神様は気絶してしまうだろう。周囲を見るのが怖くて、なかなか「光あれ」と言えなかった。うじうじしていると、前の方からネコの声が聞こえた。またあのメスネコだ。「おい、神ちゃん、仕事したらどう」。神ちゃん？ なんとという馴れ馴れしさだ。畏敬のカケラもない。

「神ちゃんはないだろう。おれはお前の作り主だよ」「作り主だか牢名主だか知らないけど、起きたらどうよ」クソ生意気なネコめ、いざれ思い知らせてやる、と憤慨しつつ、神様は不覚にも「はいっ」と返事をしてしまった。何たる失態だ。それから、やっと「光あれ」と小声で言った。

見渡せば、心配だった草原は昨日のまま変わりなく、花は咲き乱れ、まるで天国のようだ。我ながら

素晴らしい出来栄ではないか。すぐ目の前にメスネコさえ座っていなければ気分は最高なのに。「あのさあ、モノには限度ってあるでしょ。夜は暗くしてとは言ったけど、あんなに真っ暗にすることないじゃん。いくらネコでも目が見えないよ。なんかないの、空を少しだけ明るくする方法」神様は「知るか」と思った。しかし、ここは鷹揚に構えたほうが徳がありそうに見えるはず。「真っ暗だとそれほどお困りか。私の考えが至らなかった。謝るぞ」

「だめだよ、いまさら高尚ぶっても。ケツはとっくに割れてんだから」

「じゃあ、どうすりゃいいって言うんだよ。文句があるなら解決策くらい考えてこい。役立たずネコ」連日の朝一クレームに、神様はキレかかった。

「ちゃんと考えてあるもんね。まず、照明の設計が悪いんだ。昼間は空一面が満遍なく明るくて、完全な面光源になってる。まるで影がないから手術台上みたい。慣れろって言われれば慣れるけどさ。それから、照明がオンとオフしかないのも大問題だね。フェードイン、フェードアウトできないの？」

「なんだ、そんなことか。神に不可能はない」

「じゃ、すぐに直してよ」

「どうやって？ どうすりゃいいんだ？」

「あーあ、やっぱり。創造主の問題解決能力はきわめてゼロだな」

凶星なので神様は黙っていた。ネコも意地悪く黙っていた。たまらなくなつて神様が言った。

「わかつた、降参する。お前をおれのブレーンにしてやる。仕事を手伝つてくれ。名前も付けてやる。マリアでどうだ」

「イザナミでもいいよ」

「そりゃちよつと。お前は神様じゃないだろ」

「ばれたか。まあいいや。それじゃ解決方法を教えるね」

こうしてネコのマリアは、太陽と月と星の作り方を教えた。地上に影ができ、夜も真つ暗ではなくなつた。ついでにネコは、風や雨といった天候も神様に教えた。自然に川ができ、湖ができた。

作り終えて、「ほんじゃまあ、今日はこのくらいに」と言つてネコは帰つて行つた。

ネコを仕事に引き込んで、楽になつたのか創造主

始めた。

神様はその後、ウマ、ウシ、サイ、カバなど、草を食う動物を次々に作つた。その中で一番気に入つたのはウマだ。稲妻のように速く走るのがいい。よし、こいつの変種を作ろう。神様は縞模様のウマを作つた。シマウマができた。もつと作ろう。今度は縞模様を網目の模様に変え、それだけじゃつまらないから首を目いっぱい伸ばしてみた。キリンができた。

キリンは地面の草を食いにくそうに食つていた。こりゃちよつと首を伸ばしすぎたかな。明日の朝になつて文句を言われるとイヤだから、キリン用に背の高い草を作つた。それが木になつた。

もう夕暮れだ。今日もよく働いた。太陽が地面の下に消えるのを見届けて、神様は丸くなって眠つた。

その夜、誰かが神様を訪ねてきた。小さな声で「神様、創造主、作り主、万世一系の初代、ちよつといいですか」と言っている。うわあ、こんな夜中にもクレームかよ。

「どうぞお入り。ドアはいつでも開いている」

の立場を乗っ取られそうになっているのか、神様には判断がつかなかった。ひとつ言えるのは、もうネコからはクレームが来ないことだ。それだけでも助かる。

気付けば昼間は終わりがけていた。そうだ、悪夢が現実にならないように手を打たなければ。草を無節操に伸ばさないためにはどうすればいいか。マリアがいる間に相談しとくべきだった。仕方がないので自分で考えることにした。

まず思いついたのはネズミを増やすことだ。ただ増やすのではだめだ。あの小さな体では一日に食う草の量はたかが知れている。ネコくらいのサイズのネズミを作ろう。タグレットにネコの絵を読み出し、また文句を言われないようにシツポを短くした。そしてその分だけ耳を長くした。腕も短くして、その分だけ足を長くした。うん、ネコよりかわいい。そのまま添付で送信すると、草原にウサギが現われた。また色を塗り忘れたので真つ白だ。まあいいや。

もつと大きな動物も作ろう。草をバクバク食うやつがいい。何通りか描いて添付で送ると、ヤギとヒツジが現われ、期待通りに草原の草をバクバク食

「ドアってどこですか」

誰だかわからないが洒落の通じない奴だ。「もつと近くにおいでつてこただよ」

「それじゃ失礼して」と、入つてきたのはウサギだった。手には白くて丸いものを持つている。

「なんだ、ウサギのオヤジじゃないか」

「はい、この度は創造してくださつてありがとうございます。一族を代表して貢物を持ってまいりました」

「明日じゃいけなかったの？」

「ええ、硬くなると不味いので。搗き立てがよろしいかと。どうぞ召し上がってください」

いつもはカスミを食つて生きている神様だが、ウサギが持つてきた餅には心が揺らいだ。貰つていいのだろうか？ 収賄にならないだろうか？ 夜中だから誰も見てない。もらっちゃえ。

それは天にも昇る旨さだった。天国の味とは、きつとこのことだろう。

「ウサギよ、よく気が付いたねえ。これまで作った動物で、文句だけ言うのはいても、お礼に来たのはお前が初めてだよ。なにか褒美をやる。何なりと

言ってみろ」

「身に余るお言葉、感涙とどめるところを知りませ  
ん」

「うん、いいからいいから。言ってみな」

「それじゃですね、うーんと、一度に子どもが十匹  
以上生まれるようになりますか」

「簡単だ。もうなった。それから？」

「もうないです」

「何と欲のない奴。気に入った。でもな、手ぶらで  
帰すわけにもいかんし、そうだ、空に出ている月に、  
お前の肖像画を刻んでやろう」

月にウサギの絵があるのは、このような理由から  
である。

ウサギの訪問で気を良くした神様は安らかに眠り  
に付いた。毎晩こうならストレスなどないのに。し  
かししばらくして、テレパシーが何か言っているの  
に気づいた。

「メール送りましたので受信してください。わかっ  
たら返事して。ねえ、返事して」

「るせえな、時間外だぜ。わかったよ、受信しとく」  
タブレットをオンにして、神様はまた眠った。

## 五日目

少し寝不足かな、と思いながら神様は起き上がった。ウサギの餅は旨かったなあ。それから、あつ、  
そうだ、メールがどうか言ってたつけ。枕元のタ  
ブレットを見て、神様は驚いた。超大量のメール  
が届いていたのだ。PDFで十五億ページ以上ある。  
タイトルは、『生物多様性の継続的維持に関する大  
銀河長老連合会議第三支部総会の議定書（暫定版）』  
というものだった。なんだこりゃ。

神に不可能はない。だが、したくないことはある。  
この書類を読むのは、できればしたくないことだっ  
た。そして、アタマの数百ページを読むと、それは  
絶対にしたくないことになった。なにしろ宇宙の  
最初から説き起こしてあって、ビッグバンによって  
無から有が生まれたまでがいいが、そもそも『無と  
は何か』の哲学的考察に話に移り、まだまだ延々続  
いていた。とつても付き合いきれない。

「おーい、これ、何が書いてあるの？ 要約してよ」  
テレパシーに話し掛けた。

「それがそのう、こつちでも全員で解析中ですけど、  
意味不明で」

「シカトしていいのかな」

「それはまずいっしょ。長老連合ですから。ええと、  
多分ですけど生物多様性の継続的維持については  
ないかと」

「タイトルのままじゃん」

「これも推測ですが、昨日やったことが問題になっ  
ているのではないかと」

「何したつけ」

「草食動物をたくさん作ったでしょ。あれです」

「いけないの？」

「はい、このままだと動物も植物も、遠からず全部  
死にます」

「どうしてさ」

「草が食い尽くされるからですよ。草がなくなれば  
草食動物は死にますし、ネズミの食い物もなくなっ  
て、ネズミとネコが死にます」

「どうすりゃいいのさ」

「少しは自分で考えてくださいよ」

「無理。頭使いたくないから神様になったんだから」

「しようがないな。あのですね、たとえば肉食動物を作ればいいかと」

「どして？」

「草食動物が食われて数が減ります。そうなれば草は食い尽くされません。わかりますか？」

神様はしばらく考えていた。半分くらいわかった気がしたので、「そうだな」と言った。

「じゃ、作れますか？」

「どんな動物を何種類作るの？」

「あーあ、はいはい、わかりました。神様に最適なソフトがあるので使ってください。『新世界で行こう』というリアルシミュレーションでアートのインクのソフトです。ゲーム感覚で世界を作れますよ」

「それいい！すぐに送って」

「もうあります。雲の上のサーバに入っています。タブレットでつないでみてください」

これが世界最初のクラウドコンピューティングになった。

神様はゲーム画面を開いて、ソフトが訊いてくるまま、世界の大きさや地形、今いる動物を人力した。すると、沈痛を絵に描いたような顔の男が画面に出

のはこの時である。

勝手に動いているタブレットをポーッと見ていると、またネコのマリアがやって来た。悪い予感だ。

「なにやってんのさ。ひまそうに」マリアが言った。

「生き物を作ってるんだ。ひまじゃない」

「コンピューターが自動で作ってるように見えるけど。神様はちよーひまそう」

「だから、それを見ているのだ」

「アタシにも見せて」マリアはタブレットを横取りした。「わあ、面白い。これまでに作った動物の一覧って出るかな、あつ、出た出た。へえー、魚ってこういう形なんだ。ちよつと変えてみよう」いきなり尾びれの向きを水平にしてOKを押した。クジラやイルカが誕生した。

「こら、勝手に作るな。神の仕事だぞ」

「いいじゃん、ヘンなの作っても適応できなきゃ死んじゃうんだから。もつとやってみよう」

アヒルから翼を取って、手足とシッポを付けてOKした。カモノハシが出来上がった。ネズミに羽を付けるとコウモリになった。リスにも同じようにしたらムササビになった。「ひゃひゃ、楽しいな」

て来て「資金が底をつきました」と言った。次に「一度だけ再チャレンジできますが、どうしますか？」と文字が出たので、神様はYボタンを押した。

ソフトは、まず陸地を削れと言ってきた。湖のような水面にするらしい。OKすると、あつと言う間にマップの三分の二が水面になってしまった。「水分の蒸散量を最適化しました」とソフトが言った。陸地が消えて、なんか損した気分だ。動物はこんなに水を飲むのだろうか。飲んで全部が小便になったら臭くてかなわん。神様は動物に飲まれないように、今作られた大きな水面に「塩」と書いた。海の水が塩辛いのはこのためである。

ソフトは新しい動物をどんどん紹介してきた。作る場合はOKを、作らないならNOを押すのだ。最初はさすがに少し考えてからOKを押していたが、そのうち面倒になって、何も考えずにOKにした。百種類くらい即座にOKにすると、ソフトは「以後、全部OKにしますか？」と訊いてきたので、これですまじい勢いで生き物が増えていった。動物、植物、魚、微生物等々、すべての生き物が誕生した。

コモドドラゴンの超拡大版を作ろうとしたので、たまりかねた神様はタブレットを強引に取り戻した。

「せっかくゴジラを作ろうとしたのに」マリアが文句を言う。

「遊びじゃないんだ。すべての生き物が死に絶えないように、きちんと計算して作ってるんだぞ。余計なのは作っちゃいけないんだ。それはそうと、何か言いに来たのではないかね」

「そうだった。あのさあ、ちよつと頼みがあるんだけど」マリアが言った。

「面倒はイヤだよ」

「ちやうよ、面倒起こしてるのはそっちだもん」

マリアが言うには、朝方ヘンなネコが来たと言う。ネコの背中に羽が生えてバサバサ不恰好に飛んできて、マリアの前にドサツと着陸すると「ゆうとくがな、わりや孕んじよるよ」と言ったそつだ。

「それはガブリエルだ。受胎告知、おめでどう」

「子どもができたのが目出度いかどうかわかんないけどさ、どうしてあんな不細工な飛びネコが知ってるのよ。あんた、みんなに言ったでしょ」



「何を」

「だからあ、昨日の夜オスネコがしつこかったのを」

「知らんよ、そんなこと」

「まーたまた。どっかに隠れて見てたんじゃないの、すけべ」

「おれはずつとここにいたよ。ウサギに訊いてみな」

「マリアは神様をしばらく睨んでいたが、「まあいいや。どっちも責任とつてもらうから」

「責任って、おれの子じゃないのに」

「やだあ、自惚れてる。アタシ年寄り嫌いだもん。無人島に行ったってやだよ。そうじゃなくて、オスネコを作った責任よ。あんなウザいのがいなきや子どもなんかできなかつた」

「ちよつと待て。シツポからオスネコ作れって言っただのお前だぞ」

「そうだったかなあ、忘れちゃった。でも、オスネコ作ったのは神様でしょ。その責任のこと」

「世界ができたときから、女性というものは都合よく忘れて、そのくせ記憶力は良いのだ。」

「わかつたよ。なにすればいいんだ」神様はほとんどヤケクソだった。

「へえー、できないんだ。神様なのに。じゃ、きくけどさ、世界で一番偉いのはだあれ」

「おれだよ。神様だ」

「その神様は、たかがゲームソフトの言うことを聞かなくちゃならないんだ。ふーん、そうなんだ。つてことは、一番偉いのはゲームソフトだね。みんなに言ってる。キリンとイヌとカラスとクラゲと、そうそうウサギにも」

「待てっ。ちよつと待て。わかつたよ」

「ネコのマリアは神様からタブレットを取り上げ、サルをベースに新しい動物をデザインした。斬新な動物にしようと、全身の毛を抜いてみた。あまりにツルツルだったので、頭の上とその他数箇所だけ毛を生やした。不恰好で知能の低そうな動物になった。マリアが送信ボタンを押すと、すぐにその新生物が現われた。目はどんよりと曇り、口は半開きで体中から力が抜けていて、見るからに愚鈍そうだ。」

「ちよつと馬鹿そう。使えるかな」マリアが言った。

「お前が勝手に作ったんだろ。でもまあ、名前くらいは付けてやろうか。そうだな、人間っていうのはどうだ」神様はやる気なさそうに言い、新生物の名

そのとき、タブレットからビー音が聞こえ、画面に『ミッション完了』の文字が出た。続けて次のような警告メッセージが表示された。『この世界の生態系は理想に極めて近い形で構築されました。今後、たとえ小さな昆虫一種類でも生物を追加してはいけません』

神様は満足した。隣にマリアさえいなければ完璧な満足といえた。

「よかつたじゃん。これでネコは絶滅しないね。安心して子どもを産もう。それでさ、アタシも育児で忙しくなるから、家政婦っていうか執事っていうか使用人っていうか、ネコの面倒を専門にみる動物を作ってほしいんだ」

また難題を。警告が出たばかりなのに、このネコは何を考えているのだ。

「それはダメだ。タブレットの文章を読んだろ」

「読んだけど。それがどうかした？」

「これ以上生き物を作ると生態系が崩れるんだよ」

「だから？ いいじゃない一種類くらい。すぐくマイナーで繁殖力も弱い動物にすれば問題ないでしょ」

「できないね」

前は人間に決まった。

「ねえ、これ一匹しかいないよ。一匹じゃ繁殖しないでしょ」

「それが？」

「だからシツポ付けといた。シツポでもう一匹作ってよ」

「手回しのいいことで」神様は人間のシツポを根元から切つて、つがいになるようにもう一匹作つた。

「これでいいだろ。早く連れて帰れよ。今日はもうおしまい」神様は疲れていた。それもこれも、あの意味不明の議定書とかいうメールが元だ。世界を作るのは想像外に面倒だった。多分、これからも面倒は続くに違いない。それならいっそ、世界など破壊させたほうがましだ。なにが生物多様性の持続的維持だ。くそくらえ。

「えーと、ついでにお願いがあるんだけど」マリアはまだいた。二匹の人間はボーッと空を見ていた。

「このとおりアホすぎるから、少し知恵を授けてくれないかな。多少の思考力と理解力と想像力と、できれば自我と積極性と繁殖意欲と、あと何だろう」

「それだけで充分。つまりネコ並みにすればいいん

だろ」

「そつそつ」

神様は二匹の人間の頭上に手をかざして念力を加えた。ちよつと加えすぎたかもしれない。疲れていたらからうまく加減できなかったのだ。

人間の瞳が輝き始めた。マリアが「帰るよ」というと素直にうなずき、昨日の夜にマリアとオスネコが作った『ネコの宮殿』に向かって歩き始めた。

## 六日目

幸い、誰もクレームを持ち込んだり表敬訪問に來なかつたので、神様はぐっすり眠れ、目覚めの気分は最高だった。草原では動物たちが草を食べ、空にはきれいな鳥が舞い、木の陰ではもうライオンの子が生まれていた。

神様が二度寝しようとしたとき、またネコのマリアが現われた。

「ちよつとお、なにさ人間つて。役に立たないだけじゃなくて風紀紊乱、傍若無人、羞恥心皆無、自制心無し、この世で一番下品で下劣な動物だよ」

「お前が作ったんだ。文句言うな」

「アタシはこれでも非常に我慢強くて寡黙なんだよ。あんなに耐えるネコはいないって、この辺じゃ有名なんだ。そのアタシが辛抱できないって言ってるんだから何とかしてよ」

「お前が我慢するとか寡黙だとかって初めて知った。その人間とやらは何をしたんだ」

「今もやってるよ。自分の目で確かめてよ。さあ、

その重いケツを上げて付いて来て」

仕方なく神様はマリアの後に続いて歩き始めた。

「きのう、あれから家に帰って、寝るところがなきやかわいそうだからネズミ捕りのエサを置いてる小屋に入れてやったんだ。エサの場所だから餌殿エサデンっていうんだけどね。したら、まだ日が暮れないうちから大声出してサカってるんだよ。あんまりうるさいからオスネコが見に行ったら、エサ用のリンゴを食い荒らして二匹でからまつてるっていうじゃない。アタシが行ってどやしつけても効果なし。一晚中騒いでて、まだやってる。あいつら働くのが仕事なのに、全然言うこと聞かないんだ。リンゴを集めるのだって苦労したのに、それをバクバク食いやがって」マリアはまくし立てた。

神様は思い当たって言った。「もしかして、人間を作るとき、設定画面で『発情期』の変数を入れ忘れたのと違うか。何もチェックしないと、デフォルトで『通年』になっちゃうんだけど」

「えつと、そんな項目あったっけ」

「やっぱりな。それだよ」そのうちにネコの宮殿に着いた。

アリアの言うことは大袈裟ではなかった。草作りの小屋から人間の奇妙な大声が聞こえていた。「イブ、イブ」とか「アダム、ダーリン」とか言っている。「ずっとやってんの？」神様が訊いた。

「そうだよ、フクロウも知ってる」

授けた知恵が、どこか間違っていたに違いない。繁殖意欲が強すぎたのか、思考力が弱すぎたのか。

「おい、ちよつとごめんよ」神様が人間に言った。

「うるせえなあ。人の恋路を邪魔するやつは犬に食われるぞ」中からオスの声が返ってきた。

「犬は私を食わない。神様だからだ。話がある。ちよつと出ておいで」

人間のオス、自称アダムが汗を拭きながら出てきた。「なんだてめえは」

「お前たちの作り主、神様だよ」

「作ってくれなんて頼んでねえぞ」

「ま、イキサツはともかく、そうなんだ」

「勝手に作つといて、勝手に邪魔して、なんか恨みでもあるってか」

「そうではないのだ。少し節度をわきまえてほしいと思っただけ」

みな。ほらほら」

「お前らやめんか。いさかいはよろしくないぞ。まあ聞きなさい。私は神様で、私がこの世界を作ったのだ。お前たち動物も私が作った」

「正しくは、人間はアタシが作った」マリアが言った。

「うるさいよ、今は私がしゃべってるんだ」神様はマリアを睨みつけた。マリアはふてくされて横を向いた。

「つまり私はすべての主なのだ。だから私は尊敬されるのだ」

「尊敬の根拠としては弱すぎるね。だからどーしたって言われればそれまでだろ。作ったから尊敬しろだど？ それだけの理由じゃ尊敬は無理だね」

「じゃ、どうすれば尊敬するのだ」

「そっだな、たとえば尊敬してやる代わりに何かよこせ」

「うーん、見返りがほしいのか。わかった。尊敬してくれたら無限の愛を与えよう」

「ぎゃは、愛？ 愛だど？ 足りてらあ。イブがいるもん」

「そっいうんじゃなくてだな、えーと、救いの愛だ」

「節度も節分もあるか。俺はイブを愛してるんだ。イブも俺を愛してる。愛を確かめ合ってるのに説教されるいわれはねえよ」

「説教ではない、神の声だよ」

「そうかい、じゃ、もう聞いた」アダムは小屋に引っ込もうとした。

「おい、待て。まだだめだ」

「るせーネコだな。早いとこ毒ダンゴでも食って死ぬね」

死ねたらいいのにな、と神様は思った。

「あんなあ、私は神様なんだ。少し敬う気はないかね。尊崇の念を抱かんかね」

「なにをお？ 俺たちを勝手に作っただけで、今度は敬えだど？ ウヤマウつていうのは偉い相手にするもんだ。おめえは偉いのか？ どのくらい？」

「ええと、すごく偉いはずなんだが、な、マリア」

「アタシに振らないでよ。何とも言い難いじゃない」

「ほれ、そのネコビッチも偉いなんて言わねえだろ」

「ビッチとは何よ」

「怒るとかわいいね、このネコ。もつと毛を逆立て

「ワケわかんねえ。どつちみち要らないよ。くそ役にも立たない愛なんて」

「後悔するぞ。私の愛がないと地獄に落ちるぞ」

「今度は脅しかよ」

「脅してはない。事実だ」

「まあ、そのくらい事実を錯覚してなけりや、自分で自分を偉いなんて言わねえだろうな。もういいよ。イブが待つてるから帰るぜ」

「だめだ。私を尊敬すると言いなさい」

「言っただけでもいいけどなあ。そんなら無限の愛を永遠に超越すって誓約書を書きな。今ここで。神との契約だ」

「そりゃ喜んで約束するが、紙にするのはちよつと」

「小さかしい木っ端役人みたいなこと言っただけ。証拠を残して後で振り回されるのがいやなんだろ」

「ちやうちやう。私は万物の作り主だ。すべての生

あるものは私の前では平等だから、種類の動物だけ特別扱いして誓約書を書くのは無理なのだ。もし仮に、全部の生き物が誓約書をくれと言ってきたら、世界中の紙がなくなっても足りないだろ。だから約束はしても誓約書は書かないし例外も認めない。絶

対に無理」

「てーことは交渉の余地なしってことだな。まあいいよ。文句言ってるのはあんたの方だから、勝手に言っただけいいさ。俺は帰るぜ」

「待ちなさい」

「まだなんかな？」

ついに待ちくたびれてイブも外に出てきた。「ダーリン、こんな宗教フリークまがいの相手することないわよ」アダムにしなだれかかった。

「たしかにそうだが、イチャモン付けられて黙ってるのも業腹だろ？ ちよいと構ってやってるだけさ」

「それじゃ、なるべく早くね」イブは餌殿に戻った。

神様は、どう決着を付けようかと考えていた。この論戦に負ければマリアは世界中に言い振らすだろう。おれの威信は地に落ちる。それだけは避けたい。「アダム君、少々訊くが、いつからイブを愛しているんだ？」

「ええ、参ったなあ。ノロケろっていうのかい」

「聞かせておくれよ」神様はウインクした。

「あんたも好きだねえ。いやあ、最初に会ったのは昨日だよ。自然と俺の横にいたんだ。そしたら白

いへビが入ってきて、俺たちに『愛し合ってるかい？』って言ったのさ。そんなときからだ。で、へビはリングゴを食ってみろ、とも言った」

「くっそお、あのへビ野郎が仕掛けたわけね」マリアが目を三角にした。「ちよっとお、アダムとかいうボンクラ。へビに何言われたか知らないけど、そもそも人間はね、ネコに仕えるために作られたんだよ。ねえ神様」

「私に振ってはいけない。お前が勝手にしたことだ」  
「あらま、責任逃れね。アタシがどんなに優秀なネコでも、生き物作るなんてできないよ。それはあんたの専売特許でしょ」

「そうだが」

「ほらごらん、人間は神様が作ったんだ。ネコのために。なのになにさ、働きもしないで子作りしてるだけで、大切なネズミ捕りのエサまで盗み食いして。お前らは泥棒だよ。これからコキ使うからそのつもりでいな」マリアはふんぞり返った。

「聞き捨てならねえな、ネコビッチ」

「わあ、またビッチって言った」

「うるせえよ。おうおう、人間はネコのために作ら

れただど？ それがほんとなら、やい、神様とかいうドブ板ネコ、お前は嘘つきだ」

「私は嘘などつかん」

「さつき何て言った？ すべての生あるものは平等だとか何とか、理想論並べ立てたんじゃねえのか」

「ま、そうだが」

「言っという論理的矛盾を自覚しねえの？ 平等なはずなら、どうして人間がネコに仕えたり使われたりしなきゃならねえんだ。えっ？ 何とか言ってみろ」

「お説ごもつとも」

「降参だな？ 素直でいいや。それでネコビッチ、どうして人間が泥棒なんだ。リング食ったからか？」

「そうに決まってるじゃん」

「ふーん、じゃ、リングはネコのもんだってことだな。この泥棒ネコ」

「わー、今度は泥棒って言った」

「よく考えてからモノを言えよ。生き物が全部平等なら、リングの木とネコは同格だ。リングの木が生らした実を、勝手に取ったネコは泥棒じゃねえか。ネコは泥棒だよ。盗人猛々しいあこのことだ。ぐずぐず言わねえでリングを全部元に戻して来い。そ

したら俺たちも食わねえ」

「そりゃ君、かなり乱暴な意見だと思っが」

「乱暴も棍棒もあるか。大体な、何にも無えところに勝手に世界作って、生き物こさえて、そつちのほうで乱暴だろ。作られたこちどらの身にもなってみる。被害者もいとこだぜ。無自覚の加害者が一番タチ悪いって知ってるか？」

「すごい論理展開。人間はいつこんな利口になったのだ」

「あいにくだね。あんたの作り方が良かったからだろうよ。さて、これから示談交渉だ」

人間が要求してきたのは、もっとラクチンに生きさせろ、ということと、生き物はみな平等というのを撤回して、人間だけに『何しても怒られない』特権を与える、という二点だった。神様は困った。人間の要求には根拠が無いが、根拠が無いことを説明する根拠も無かったからだ。

「ちよっと待っててくれるか。その辺で考えてくる」  
神様は言っ、マリアを連れてネコの宮殿に入った。

「どうしてあんなバカに言いたい放題言わせるのよ」

マリアが食ってかかった。

「お前が墓穴を掘るようなこと言うから話が拡大したんだ」

「アタシ、なにも言っていないよ」

黙っていたオスネコが初めて口を開いた。

「仲間割れしてる場合じゃないと思いますよ」

「そうそう、善後策を検討しましよ、ねえ神様」マリアも態度を変えた。「アタシはただ、人間に餌殿から出てってもらえばいいのよ。この小さな小さな心の望みを叶えてくださるかしら」目をパチパチさせながら言った。

「わかっているよ、そんなこと」神様は考えを巡らした。

人間をネコの領域から追い出すのは賛成だ。というか、この世界から追い出すべきなのだ。そもそも、ソフトが作ってはいけないと言った動物で、この世界には余計な品種なのだ。もしどこかで生かしておけば、後々必ずトラブルメーカーになるだろう。この際、抹殺するしかない。そうしよう。そう決めた。神様は腹をくくった。

「なあマリア、神様は嘘をつかない原則だが今は非常時だ。これから戻って人間にオイシイ話をする。

全部嘘だが調子を合わせてほしい。どうだ？」

「あの淫乱クソ虫がいなくなるなら何でもする」

神様とマリアは餌殿に戻った。人間のアダムがリングを齧りながら待っていた。

「早いやねえか。人を待たせない程度の常識はあるんだな。で、どうする？」

「私は熟考したのだ。その結果だが、いやあ全面的にお前の言っていることは正しいという結論に至った。さっきは悪かったな。アダム君の要求は当然のことだ。全部認めることにしよう」

「やけに話の分かりがいいじゃねえか。悪いもんでも食ったか？」

「ああ、リングを一口食べたならそうだった」

「じゃ、生き物の中で人間が一番偉れえでいいんだな？好き勝手に生きてても文句言わねえな？」

「もちろんだとも。今後は、人間こそ唯一、神に免罪された存在として扱われる。それから、なあアダム君、優秀な生き物の人間が、こんな辺鄙な片田舎に住むのは似合わないと思わないか」

「たしかにな。こんな小汚ねえ場所でとぐるを巻くんなら、面白くもおかしくもねえな」

「そこで、新しい土地を用意した。生物の王、人間にふさわしい、快適で文化的な歓楽街だ。バビロンという街で、上下水道完備、羽根布団で酒池肉林の理想郷だが、引越す気はないかね？」

「いいね、とってもグーだ。だけど、あんまり遠いのはイヤだぜ。歩くと疲れるから」

マリアが小さな声で「パーがグーだって」と言ったが、幸い人間には聞こえなかった。

「いや、人間を歩かせるものか。ちゃんと乗り物を用意する」

「んじゃ遠くてもいいや」アダムはニコニコした。それから声をひそめて、「そこにや他の女もいるのか？」

神様も声をひそめて「いるいる、お好みでいかようにも」

「わかった。決めた、バビロンに引越すぞ」

神様は空に向かって「おーい、雲」と呼んだ。

極彩色の雲が降りてきた。運転手は頭に金の輪を巻いたサルだ。

「このおふた方を東のほうの街まで送り届けなさい。片道料金しか払わないから、帰りは必ず空車で帰っ

て来るように」とサルに言った。

アダムとイブが雲に乗り込むと、サルはすぐに発進させ、瞬く間に見えなくなった。

「あーあ、一件落着だな。餌殿から追放してやったぞ」神様が言った。

「バビロンなんていう街が本当にあるの？」マリアが訊いた。

「あるわけないだろ。出まかせだよ。運転手のサルは雲助だが、言うことはきく。帰りは空車だから人間は乗れない。ってことは、つまり人間は、『ここではないどこか』に行ってしまったわけだ。でも、『どこか』なんてどこにも無いから、未来永劫、暗く冷たい時空の狭間をさまようことになるんだ。ざまあみろ」

## 七〇目

今日は休もう、と神様は思った。毎日、特に昨日までの三日間は八面六臂の大活躍だった。ここらで一日くらい休んでもバチは当たらないだろう。

『本日休業』の札を入り口につけ、山や川や草原をぼーっと眺めた。優雅な気分だ。もはや悩ましい問題は皆無。この世界、なかなか捨てたもんじやない。

そのとき背中がゾクゾクし始め、テレパシーの声が聞こえてきた。

「いやあ、遅くなって申し訳ありません。今いいですか」

「よくないよ。今日は七日目で休みだ」

テレパシーは神様の言葉を無視して続けた。「本当は昨夜のうちに報告しなきゃいけなかったんですが、いろいろ手間取りましてね。なにしろ設計仕様書が無いでしょ、しかも超特急の建設工事でしたから。こっちのスタッフ全員、想像力フル回転で頑張りましたよ。ま、細かい話の前に、画像ファイルを

送ったので見てもらえますか」

このアホ、何を言ってるんだらう。

「一体、何の話をしている？」

「やだなあ、バビロンですよ」

神様は啞然とした。

「なるべくケバくですね、まず塔をいくつか建てました。バベルの塔、象牙の塔、物見の塔、火の見櫓、その他いろいろ。歓楽街でしょ、だから不夜城カジノ、飾り窓通り、満腹食堂、港の酒場、お風呂にも入れる特殊浴場とか、みんなで知恵を出し合って最大級に猥雑な街にしました。写真、見えます？」

そんなもの見たくない。

「写真はいいから。本当に作ったの？」

「もちろんです。神様がいきなり『バビロン』なんと言うんだもの。寝耳に水でしたが、いったん神様が言ったからには、『もうある』わけですから、人間が到着するまでに大急ぎで作りました。すごいでしょ。褒めてもらってもいいな」

「うん、褒めてやる」神様は心ここにあらずで、危うく失神しかけていた。

「で、ですね。あの二匹ですが、イブというメスは、

すぐに高級ブティックに駆け込みました。アダムのほうは飾り窓の一軒目に飛び込みました。幸せそうでしたよ。神様も粋だね」

そうか、そういうことか。計算が狂ったどころか、最悪の選択になってしまった。しかし、もしかすると、と思いつながら神様はきいた。

「そのバビロンとやらは、この世界にあるの？もしかして別の世界なの？」

「この世もあの世も、世界はここひとつです。全部地続きになってます」

最後の望みも絶たれた。あの、箸にも棒にもかからない、悪知恵だけは天才的な人間という身勝手な動物を、俺はこの世に解き放ってしまったのだ。しかも事前に免罪まで与えて。

タブレットのマップを見ると、はるか東のほうにバビロンという地名ができていた。

何気なく「光あれ」と言った一日目より前に戻りたかった。光も土地も要らない。多少つまらなくても、心配事などひとつも無かった昔が恋しい。後悔してもしきれない。人間についての最大の責任はネ

コのマリアにある。でもおれは神様だ。最終的な責任は全部おれにある。マリアを呪うのはやめよう。マリアを許そう。多少の男気は見せなきゃ。

バビロンからここまで、かなりの距離がある。しかし地続きだし海もつながっているだろう。神様はこれからの世界の成り行きを想像した。

人間以外の生き物は心配要らない。そりゃ食ったり食われたりはあるだろうが、生きて行く以外の欲は無い。動物たちは他の生き物と、仲良く未永く暮らして行けるだろう。

問題は唯一、人間だ。自分たちの欲を都合の良い論理展開で正当化するのは、すでにアダムとの論戦で明らかだし、もつと悪賢い個体も出てくるだろう。人間は他の生き物へのリスペクトなどカケラも持ち合わせていないから、他の生き物が迷惑しようと死に絶えようと、まったく気にしないに違いない。あるいは、他の生き物ではなく同じ人間同士でも、他人を簡単に蹴落としたり踏み付けたりするはずだ。自分がもつとラクチンに生きるためだけに。

神様は暗澹たる気持ちになった。私は地上に毒を撒いてしまった。その毒は、今のところバビロンと



マリアの子ネコのうち3匹 左からキジシロ、クロ、ハナボチ  
初めて神様の家に行ったときの写真

いう街に留まっているが、将来必ずこの世のすべての海を汚し、空気を汚し、地面を汚し、いきとし生けるものの心を汚すことになる。私はこの世に毒を撒いた。そうだ、この世の最大の罪は自分にある。私は決して許されることのない罪びとだ。

今はまだ青々と美しい世界を、これからずっと見続けなければならぬのか。その徐々に荒廃する様子を黙って見続けるのは、いくらなんでもつらすぎる。できれば死にたかった。でも不可能なのは知っていた。そうだ、隠れちゃおう。どこか真つ暗な場所に。探されても絶対に見つからなくて、そこからは外の世界が見えない場所に。

タブレットのマップで洞窟を検索した。大きい小さいのいろいろあった。ひとつずつストリートビューで見て行くと、ここから少し西に行つたところに最適な穴があった。『天岩戸』という穴だ。

神様は何も持たなかった。タブレットも残した。出かけようとしたとき、マリアが探しに来るかもしれないと思ひ、メモ用紙に一行だけ書き置きた。

『神は死んだ』



団結のしるし、赤い首輪をしたハナボチ



旅行の食料確保のため、解凍中のイカを狙い、みつかったところ

それから数ヶ月の時が流れた。

マリアは十二匹の子ネコを産み、やっと全員で散歩ができるようになった。神様のことはずっと気になっていたし、子どもたちを見せびらかして自慢もしたかったので、ある晴れた日に子連れで神様を訪ねた。

「こんにちわあ」と叫んでも神様は出てこなかった。おかしいなあ、外出する用事なんかはないはずだけど。「かあちゃん、ここが神様の家？」子どもの一匹がずかずかと中に入った。

「なんか紙があるよ」

「よそ様の家に勝手に入っちゃダメじゃない」

「紙に何か書いてある。漢字だからまだ読めない」

「ちよつと見せなさい」

マリアの全身がこわばった。死んだ？ しかし、死んだら字も書けないはずだ。アタシがあまり構ってやらなかったからイジケて悪い冗談をやっているのかと思ひ、子ネコと一緒に七日七晩帰りを待った。神様は帰って来なかった。

その後、マリアは十二匹の子ネコに、神様を探の旅をさせることになる。